

二〇二六年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第一回）

受 験 番 号

国 語

《配 点》

一〇〇点

《試験時間》

四〇分

《注 意 事 項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は19ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったたら、解答用紙の左にある欄かんに、氏名と受験番号（算用数字で）を、正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の*印の欄には、何も記入しないで下さい。
- 五 デジタル採点を行いますので、解答は濃こくはつきりと書いて下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号ふごうも一字分と数えます。

□ 次の A ～ E の各文中のカタカナを、漢字に直してていねいに書きなさい。

- A 友とキキゲゲキキを演じて皆を明る気持ちにした。
- B 山中で古いイイココツツが発見され調査が始まった。
- C 海外製の飛行機のモモケケイイを丁ていねい寧ねいに組み立てた。
- D 時代劇ではシショョウウゾゾククが細部まで再現される。
- E 地域では協力の輪をココウウチチククする活動がある。

□ 社会学者の G・W・オルポート（一八九七年～一九六七年）は一九四七年に発表した著書の中で、情報の伝達についての実験を行い、情報が人を介するにつれてゆがんでいく結果を示しました。ここから考えると「うわさ」を信じてはいけな
ないと思いたくなります。一方現代の哲学者のコーディイは、オルポートが実験する際に整えた状況と、実際に「うわさ」
が伝わる際の状況とは異なることを指摘し、「うわさ」を信じてはいけないという、一見当然に思われることに反論しま
した。次の文はこうした研究成果を踏まえて続く部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。（問題文中の※は、
終わりに注があります。また、問題文中のへは上の語や語句の意味を説明しています。問題文の表記を一部書き改め
てあります。）

判断を保留する意味

ここまでみてきたように、通常のうわさは、X。つまり、うわさを伝える人は、単に右から左へと情報を受け
流す存在でもなければ、歪みの発生源でもなく、自分で手にした根拠をもとにその情報の正しさを自分自身で判断できる知
的に自律した主体でありうる。

そしてその自律性は、自分が聞いたうわさを信じるかどうかだけでなく、そのうわさを他人に伝えるかどうかに関しても
発揮される。つまり、オルポートの実験状況と違い、われわれはうわさの信頼性が低いと判断した場合や、正しいかどう
か判断できない場合に、その情報を「伝えない」という判断をすることができ、古代ギリシアのピュロン派の懐疑主義は、
ある主張をそのまま受け入れるのではなく、かといってその主張をすぐに否定してしまうのでもなく、いったん正誤の判断
を保留することが重要だと考えた。うわさについても嘘か本当かをすぐにどちらかに決めたくなくなるが、いったん判断を保留
したうえで、誰にも伝えないという判断をすることは、フェイクな（偽の）うわさの拡散を防止する意味でも大切なことと
なる。

さらにコーディイは指摘していないが、聞き手が伝え手に対して質問できることも実験との重要な違いである。われわれの
うわさの伝達は、伝言ゲームとは異なり、不明瞭なところや納得できないところについて相手に尋ねることができ、そ
してこのような自発的な質問を経て、疑問点を払拭（ぬぐいさる）できたならば、他人に伝えるかもしれない。あるい
はそれでも疑問点が残るのであれば、自分のところで留める判断をすることも可能。このとき、うわさを媒介する（橋渡
しする）人は知的な自律性を発揮しているといえる。

ここまでみてきたことを逆向きに捉えれば、あるうわさが伝わってきたという事実は、そのうわさがこれらの判断のライターを潜り抜け、生き残ってきた情報であることを示している。したがって、先ほど、うわさの定義に組み込んだ「多くの人があいだに入る」という特徴は、必ずしもオルポートのいうように情報を不正確にするとは限らないし、人間というライターも情報を歪める方向にのみ働くわけではない。うわさが広まっていく過程は、オルポートの実験のような受動的な伝え手によって担われるのではなく、知的に自律した伝え手が情報を批判的に吟味（内容をよく調べ考えること）しながら媒介しうる。その過程を通じて情報の不足や不備が補われ、正確さがより増していくこともありうる。したがって、多くの人があいだに入るという事実はうわさを信頼できないものにするのではなく、むしろうわさの信頼性を増すものだと考
えることもできる。

ネット上のうわさは信じてよいのか

では、ネット上のうわさはどうであろうか。SNS上で広まった「ライオン脱走」や「トイレットペーパー品薄」などのうわさの媒介者には、知的な自律性を発揮する余地はあつたのだろうか。

まず、リアル社会ではうわさの拡散の範囲は限定されている。それは、近い人間関係を経由して伝わっていくからであり、うわさを伝える行為そのものに一定の時間がかかるので、そもそも短時間に広範囲に伝えることが不可能だからである。

一方、インターネットはまさにその不可能を可能にした。

I

その結果として、その情報が届く人たちが多様になつた。

日常生活では、趣味の話であれ、学校の話であれ、学問の話であれ、同じ話題に興味をもち、ある程度同じ知識を共有しているメンバーで会話のグループが形成されることが多い。それに対して、ネット空間は従来であれば交わることのないグループに属する人たちが一堂に会する場を提供した。このような状態は「文脈（ここでは物事の背景）の崩壊」と呼ばれ、文脈を共有しない者同士のコミュニケーションにさまざまな認識的な問題が生じることが指摘されている。そのひとつが、前提知識が共有されていないことである。あるうわさについて、その分野や地域についてある程度知っている人であれば否定できても、そうでなければ、真実のように思えてしまうことがある。また、前提知識が共有されていないがゆえに、そこで伝えられている言葉の意味を誤解して受け取ってしまうこともありうる。

A

このようにうわさの内容を理解し、判断する文脈が共有されないネット空間では、うわさの主題についての事前知識をも

っているという第一の論点が成り立たないことが多い。

うわさを伝え合う人間同士の関係性については、ネット空間でさらに大きな違いが出てくる。というのも、ネット上のうわさはよく知らない人同士のあいだで広まっていくという点に大きな特徴があるからである。もちろん、ネット上でも公開範囲を知人に限定できるが、必ずしもそうなっているわけではない。そして、不特定多数に公開される情報は、その情報の発信者、伝達者、受信者が互いに知らない間柄であることが多い。それゆえ、情報の確からしさを発信者や伝達者に関する事前知識から判断するという方法が使えない。

リアル社会におけるうわさの場合は、職場の同僚であれ、学校の友人であれ、そのうわさの伝達に携わった人たちをある程度推定することもできるだろう。したがって、その人たちがどの程度信頼できる情報の伝え手か、どの程度知的な自律性を発揮しているかを検討して、うわさの信頼性の有無を評価できる。たとえば、大学や職場で友人から聞くうわさはほとんど信じる人であっても、情報の真偽にあまり関心がないうわさ大好きグループから伝わってきたと知ったならば、信頼性を低く見積もることはあるだろう。ネット上のうわさは伝達者の顔が見えず、不透明になっていることも多いがゆえに、このような方法で情報の確からしさを評価するのが難しくなっている。

B

「うわさの伝え方の違いをもとに判断できる」というポイントはどうか。例外はあるが、ネット上の情報が「本当かどうかはわからないけど」という留保をつけて伝えられることは少ないように思われる。

その理由としてまず考えられるのは、ネット特有の表現の制約の問題である。とりわけSNSやX（旧ツイッター）で文字数の制限がある場合は、情報をできるだけ切り詰めて伝える必要がある。

II

、確証度を表す留保表現などは真

つ先に省略されることになる。

あるいは、もう少し積極的な理由も考えられる。いわゆる「釣りタイトル」（興味を引くためにあえて大げさにした見出し）などの例でもわかるように、ネットに情報をあげる人には、読み手にできるだけインパクトを与えて、多くの人に自分の情報をみてもらいたいという欲求が存在していることがある。さらに、ネット空間では、情報の真偽や質よりも人々の関心や注目を集めたほうが広告収益などにつながる、いわゆる「アテンション・エコノミー」が成立している。

C

「異なる情報源に由来する情報ルートが存在する」とことはどうか。この問題は二つのケースに分けて考えることができる。ひとつは、ネット上の情報の正しさをネット以外の情報ルートを通じて確かめるケース、もうひとつはネット上で別の情報と照らし合わせて確かめるケースである。

前者は、現実のうわさとそれほど大きな違いが生じないだろう。問題は後者である。

III

、あるネット上のうわ

さの真偽を確かめようとして、キーワードで検索してみたところ、同じような内容の書き込みがたくさん見つかった。このことは、そのうわさの信憑性（信憑性）を高めることになるだろうか。それは、先ほどみた情報源と伝達ルートによる。

もしもたくさんのサイトで同じ情報を伝えていたとしても、その元をたどればひとつの情報源に行き着き、同じ情報がただ繰り返されていただけだとすれば、同じ発信をしている人の数の多さはその内容の信憑性を高めてくれない。とりわけネット上では、画面上のデータを別の場所へ複製するいわゆる「コピー＆ペースト」やさまざまな情報をSNSのフォロワーと共有できる再投稿などによって、同一の情報源からの情報が大量に拡散している場合が多い。

D

ただ逆にいえば、元の情報がそのままのかたちで保存されて伝えられることになるので、リアル社会のうわさよりも情報源を特定しやすい側面もある。したがって、多数の発信に埋もれている情報源にまで遡って、本当に複数の情報源が伝えているものなのかを（前章のチェックポイントをもとに、その情報源が信頼できるかどうかも含めて）確認する必要がある。

ワンクリックで伝わる功と罪

最後のポイント「情報を伝えるかどうかを伝え手が判断できる」という点に関してはどうか。おそらくここにも、身の回りで伝えられるうわさとの違いは存在している。たとえば同僚や先輩についてのうわさを別の誰かに伝える場合には、自分が改めてその内容を言葉にして発話する必要がある、それなりに時間と労力がかかる。そして、うわさを聞く相手にもそれを聞くあいだの時間と労力をとらせることになる。現実のうわさにかかるこのようなコストは、実はけっこう重要である。それは、そのコストをかけてまでその情報を伝えるべきか考える余地が生まれ、そこまで重要でなかったり、信憑性が低かったりするうわさであれば、「わざわざ伝えなくてもいいか」となるからである。さらに、その情報を伝える相手がすぐ近くにいないことも多いので、これまでみてきたような仕方でうわさの信憑性を吟味する時間的余裕もある。③通常のうわさの場合は、これらの要素が情報の吟味を動機づけている。

それに対して、先ほどみたSNS上の再投稿はクリックひとつでできるので、ほとんど労力も時間もかからない。このような「コスパ（コストパフォーマンス）」や「タイパ（タイムパフォーマンス）」のよさは、わざわざ伝えるべき情報であるかどうかを吟味する動機を失わせる。また、その情報に触れてからクリックして投稿するまでの時間もきわめて短い。それゆえ、その情報の信憑性を吟味することが難しく、立ち止まって考え、その結果として「伝えない」という判断も生じに

く。

もちろんこのような即時性^{じじくせい}と手軽さは、災害が発生したときには、さまざまな有用な情報が瞬時^{しゅんじ}に拡散されるなど数多くのメリットがある。加えて、情報内容に手を加えない再投稿は、オルポートのいう平準化(均一になること)や同化^{まぬか}を免れて元の情報をそのまま伝達できるといふメリットがあるともいえる。しかしその裏返しとして、これらの要素はその情報を伝えるべきかどうかの判断が十分なされない要因にもなっている。ネット上のうわさの伝達者は、情報フィルターの役割を果たしていない場合が多いと思われるが、それは必ずしも本人にのみ責任があるわけではなく、リアル社会のうわさとは異なるネット上の情報共有の仕組みが、**Y**を發揮しにくい状況をつくりだしてしまっている側面もある。

(山田^{やまだ} 圭一^{けいち} 著『フェイクニュースを哲学する——何を信じるべきか』より)

※1 ライオン脱走^{だつそう} …… 二〇一六年の熊本地震^{くまもとじしん}の際にSNSに投稿^{とうこう}された、市街地にライオンが脱走したという偽^{いつせ}の情報のこと。

※2 トイレットペーパー^{しなうす}品薄 …… 二〇二〇年に新型コロナウイルスが流行した初期^{こうご}の頃、SNSから広まった

情報のこと。

問一

X

に入れるのに最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 共有された説明以外にその信頼性を検討するためのいろいろな証拠を発見できる
- イ 一般的な解釈とは別にその信頼性を評価するのに十分かつ独自の理由をもっている
- ウ 限定的な情報とは別にその信頼性を考察する上での多くの論拠を常に与えられている
- エ 伝えられた内容以外にその信頼性を判断するためのさまざまな根拠をもつことができる

問二

~~~~~

a～cの意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 自発的な質問

- ア 聞きたいと思つてした質問
- イ 仕方なく適当にした質問
- ウ ぱつと思いついてした質問
- エ 必要に迫られてした質問

b 一堂に会する

- ア 全員が一緒に動く
- イ 順番に意見を述べる
- ウ 同じ場所に集まる
- エ 気持ちを素直に示す

c 即時性

- ア 信頼性に欠けること
- イ その場で反応すること
- ウ 慎重さに欠けること
- エ 検討する間がないこと

問三 I III に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア あるいは                   イ それゆえ                   ウ しかも                   エ では  
オ たとえば                   カ ところで                   キ しかし                   ク さて

問四 \_\_\_\_\_ ①「多くの人があいだに入るといふ事実はうわさを信頼できないものにするのではなく、むしろうわさ

の信頼性を増すものだと思えることもできる」とありますが、どのようなことをいっているのでしょうか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多くの人の手を経て伝わってきたうわさは、常に信用できないわけではなく、伝えるに あた値すると思われた内容である可能性があるということ。

イ 一般の人々が伝えたいと判断したうわさは、信用できないように思われたとしても、一度は話し合って価値を見定める意味はあるということ。

ウ 不特定多数により伝えられたうわさは、一見信用できないようにも思われるが、実際にはだからこそ信用できる内容だといえるということ。

エ 多岐にわたる人が おも面白おかしく伝えたいうわさは、やはり信用できないものなのであるが、よく検討すると信じられる点もあるということ。

問五 問題文から次の一文が抜けています。この文を入れるか所として最も適当なものを、A D の中から一つ選び、記号で答えなさい。

したがって、留保をつければ人々の注目度を弱めてしまうと考えると、留保表現は意図的に使わず断言が目立つようになる。

問六 ———— ② 「異なる情報源に由来する情報ルートが存在する」こと」はうわさを検証する際に重要ですが、インターネット上でうわさを検証する際に本文で重要とされていることは何ですか。説明しなさい。

問七 ———— ③ 「通常のうわさの場合は、これらの要素が情報の吟味ぎんみを動機づけている」とありますが、どのようなことをいっているのでしょうか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 通常のうわさの場合、伝えるにしても伝えられるにしても責任があるため、その責任を負えるくらいの信用を得ようと努力するようになるということ。

イ 通常のうわさの場合、伝えるにしても伝えられるにしても手間がかかるため、その手間が少なくなるように話の内容を省略するようになるということ。

ウ 通常のうわさの場合、伝えるにしても伝えられるにしても負担があるため、その負担に見合うくらいの情報かどうかを検討するようになるということ。

エ 通常のうわさの場合、伝えるにしても伝えられるにしても時間がかかるため、その時間が短くなるように通知の方法を考慮こうりょするようになるということ。

問八 Y にあてはまる六字の言葉を、文章中から抜き出して答えなさい。

問九 問題文では、インターネット上のうわさに接する際に気をつけなければいけないことが述べられています。その内容としてあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア うわさの前提知識が共有されなかったために、認識的な問題が起こりうること。

イ 伝達者の事前知識から、うわさの確からしさを確認することが難しいこと。

ウ 伝達に労力も時間もかからないので、うわさの内容の吟味ぎんみがしづらいこと。

エ 同じ知識を持つ仲間で会話がされるため、うわさが外に流出しにくいこと。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題文中の「」は上の語や語句の意味を説明しています。問題文の表記を一部書き改めてあります。)

高校二年生の遥香(わたし)は、唯一の肉親であった祖母を亡くしてひとりぼっちになってしまった。母親(ふうちゃん)は、遥香が三歳の時に家を出て行き、それからは一度も会っていない。父親は、ふうちゃんが遥香を身こもったことを知ってすぐに逃げてしまった。ある日、「人が人生の締めくくりに見る走馬灯を作るために人生の思い出をたどる旅行会社」である「ブレイメン・ツァーズ」の葛城圭一郎から手紙が届いた。遥香は葛城に導かれ、この会社の仕事を手伝うことになった。

人の背中に触れると、その人の人生が見える。色のついている思い出の場合は、走馬灯に描かれる可能性があるが、色のないモノクロームの場合はそうではない……。遥香は葛城さんと同じ特殊な能力を持っていた。その能力を使って多くの人の走馬灯を作るお手伝いをしていうちに、ふうちゃんから「会いたい」と連絡があった。ふうちゃんは、病気で余命いくばくもない状態である。後に続く文章は、遥香がふうちゃんの病院を訪れた場面である。

はるちゃん――。

親しい人や仲良しの友だちはみんな、わたしをそう呼んでいる。わたしもすっかり慣れていて、「小川さん」や「遥香さん」よりもずっと耳に馴染んで、自分自身との距離も近く感じられる。

①でも、ふうちゃんがまた目をつぶって繰り返してくれた「はるちゃん」は、ほかの誰の「はるちゃん」とも違っていた。喉がからからに渴いたときに飲むスポーツドリンクみたいに、耳から胸まで、すうっと流れていく。最後は、胸の奥の奥、「え、胸ってこんなに深かったたけ？」と言いたくなるようなところまで届いて、なにも余りものを残さずにきれいに染み込んで、消える。

すごい。

ただし、感動や感激とは、ちょっと違う。そもそも、昔のふうちゃんが呼んでいた「はるちゃん」を、わたしはまったく思いだせない。昔の声に戻って呼んでくれたら、もしかしたら記憶がよみがえるかもしれないけど、死が目前に迫った声では、初対面の人に初めて名前を呼ばれたのと変わらない。

でも、やっぱり、すごい。

ああ、溶けた、とわかったのだ。

ふうちゃんの口にする「はるちゃん」は、胸の奥の奥の、ここから染み込んで、わたしの中で溶けていく。わたしの一部になってしまったから、もう取り出すことはできない。でも、確かに、間違いない、ふうちゃんの呼んでくれた「はるちゃん」は、わたしの中にある。

はるちゃん——。

目を閉じたまま、何度も呼んでもらった。立てつづけに呼ぶ体力は、もうない。「はるちゃん」と「はるちゃん」の間には、息継ぎよりも長い間が空いてしまう。

大輔さん（ふうちゃんの兄）は壁際にあつた椅子をベッドの横に持ってきて、わたしを座らせてくれた。わたしも素直に従った。自分のために、というより、立ったままだと、ふうちゃんを焦らせてしまうかもしれないから。

大輔さんはさらに、スマホのボイスメモの画面をわたしに見せた。録音しておこうか、と訊いてくれたのだ。そうすれば、ふうちゃんの声はずっと——亡くなったあとも、残る。

でも、首を横に振った。記録に残さなくてもだいじょうぶ。「はるちゃん」は、しっかりと、わたしに染みた。わたしの一部になった。かすれた弱々しい声は、いずれは記憶が薄れ、どんな声だったかあいまいになって、最後は忘れてしまうだろう。かまわない。「はるちゃん」は、もう、わたしから離れない。

勉強でなにかを覚えるというのは、頭の中の整理棚に並べるようなものだ。高校受験のときに読んだ参考書に書いてあった。すぐに取り出せるように並べ方を工夫しておきなさい、と。

思い出も同じだと思っていた。頭の中に整理棚があつて、わたしたちは「あるとき、あんなことがあつたよね」と思いだせるように、無意識のうちに日付順に並べたり、場所やメンバーでタグ付けしたりしているんだと思ひ込んでいた。だけど、いま、わかった。

自分の中に溶けてしまった思い出は、もう思いだせない。でも、ある。絶対にある。

そんな思い出が、人が亡くなってしまふ——すべてが消えてしまふ瞬間に、肉体から離れて、思い出の主とお別れをする。

走馬灯を見るとするのは、そういうことなのかもしれない。

ふうちゃんは肩で息をしていた。しんどそうだ。吸う息は浅く、吐く息が深い。これ以上の負担はかけたくない。

「ありがとうございます」

ふうちゃんに声をかけて、頭を下げた。

そうじゃないよ——自分でもわかる。いま言うべき言葉は、お礼じゃない。いまやるべきことは、お辞儀じゃない。

「たくさん名前を呼んでくれて、うれしかったです……ほんとに」

そうじゃない、違う、そうじゃない……

ふうちゃんは目を開けて言った。

「最後に、呼ばせて」

赤くなった目が潤んでいく。「あなたの名前、もう一回だけ呼ばせて」

息をせいっぱい深く吸ったふうちゃんは、声を出す前に嗚咽（おぼろ）へ声をつまらせて泣くことゝを漏らしてしまった。

「はるちゃん……ほんとうに、ほんとうに、ごめんね……」

わたしの体は勝手に動いた。声も勝手に出た。椅子から腰を浮かせて、ふうちゃんの手を振り、何度もかぶりを振りながら言った。

「そんなことない、そんなことない…… ■■■、そんなことない……」

やっと、言えた。

ふうちゃんは泣いた。 I に瘦せた細い背中を震わせて、嗚咽交じりの「ありがとうございます」と「ごめんね」を交互に

繰り返した。

でも、泣き声は、ふうちゃんよりも大輔さんのほうが大きかった。

「よく言った、ふう、よく言ってくれた……はるちゃん、ありがとうございます、俺もうれしい、ありがとうございます……ふう、よかったなあ

……」

わたしは黙って、ふうちゃんの手の手をさすりつづけた。胸は熱くなっている、涙は出てこない。まぶたの裏の、ぎりぎりのところで堰き止められていた。

冷静さが、頭の片隅に残っている。残さなくてはいけない、と自分に命じていた。

会えてよかった。間に合つてよかった。わたしも一緒に泣きたい。声をあげて泣きじゃくったら、いろいろなものが涙で洗い流されて、すっきりとお別れできるだろう。

でも、わたしは、ふうちゃんの手の甲に添えた自分の手をじっと見つめる。視界が涙で曇つたら、その隙に、手が別の場所に移ってしまうかもしれない。

ふうちゃんの背中に手をあてれば、記憶を覗ける。  
だから怖い。

ふうちゃんの記憶に残る幼いわたしに、色はついていているだろうか。どんな場面だろう。幸せな場面とはかぎらない。ほかの記憶だって、そう。たんぼぼの綿毛のように、  
II と風に吹かれるままの人生だったのだ。色つきの思い出は幸せなものばかりで、最期の走馬灯がおとぎ話のように「めでたし、めでたし」になるといふのは、それこそ、おとぎ話だ。  
ふうちゃんが不意に咳き込んだ。背中を折り曲げて、えずくへ吐き気をもよおすこと。ように喉を鳴らす。

わたしはあわててふうちゃんの体を支え、背中をさすった。とっさのことでも、背中にあてた手の動きを止めてはいけない、と自分に命じるのは忘れなかった。

大輔さんはナースコールのボタンを手に取って、「ふう、看護師さん呼ぶか？」と訊いた。

「……ううん、平気」

咳が治まったあとも、わたしは背中をさすりつづけた。

覚悟を決めた。

「一つ訊いていいですか」

声をかけて、「お母さん」と言い添えた。二回目の「お母さん」は、最初るときよりすなりと口にすることができた。

「お母さん……後悔とか、ありますか」

ふうちゃんは少し考えてから、首を横に振って言った。

「兄ちゃんには怒られると思うけど、いろんなこと、なんにも後悔してない」

大輔さんはハナを噉って「怒るわけないだろ、なに言ってるんだ」と泣きながら叱る。

わたしは背中をさする手を休めず、続けて訊いた。

「思いだしたくない記憶は、どうですか」

「はるちゃん、いまはそういう話は——」

大輔さんが割って入りかけたけど、ふうちゃんは微笑み交じりに答えてくれた。

「全然ない……そんなの」

さんざん泣いて、咳き込んで、ぐったりしているのに、表情には生気があった。声も聞こえやすくなった。最後の力を振り絞しぼってくれているのだ。

だから、わたしも、もう迷わない。

「いま会いたくない人は、いますか」

「いない」

すぐに答えた。「会えるなら、いままで出会った人みんなと会って、お別れしたい」

「恨うらんでる人とか……」

ううん、と微笑んで打ち消した。「恨んでた人はいるけど、いま恨んでる人はいない」

自分から、さらに続けた。

「わたしのことを恨んでる人は、いると思う。いまでも許せないと思ってる人、たくさんいる。でも、そういう人にも、会ってもらえるなら最後に会って……謝あやまりたい」

ひと息に言うと、さすがに限界だったのだろう、また咳き込んだ。わたしは背中をさすりながら、咳が治まるのを待って訊いた。「いま一番会いたい人は誰ですか」

ふうちゃんは、わたしを見つめて、「あなたに決まってる」と言った。

「幼稚園の頃や、小学生の頃や、中学生の頃のはるちゃんに……わたしが知らないあなたに、会えないけど……会いたい」  
その瞬間、ふうちゃんが揺ゆれた。ふうちゃんがにじんだ。わたしは初めて泣いた。や②つと泣けた。うれしくて、悲しくて、悔く

しくて、でもやっぱりうれしくて、涙があふれた。

背中にあてた手が止まった。泣いたはずみに、うっかり——違う、わざと。

ほんの一瞬いっしゆんだけにする。つらい思い出が浮かんでくるなら、しかたない。

目を閉じた。息づかいのテンポを、ゆっくり、ゆっくり、下げていった。

女の子がいた。後ろ姿だ。学校帰りの寄り道なのか、公園でブランコを漕こいでいる。背中の赤いランドセルが、近づいたり遠ざかったりする。そう、これは色つきの思い出だった。

女の子がいた。後ろ姿だ。ブレザーの制服を着た中学生が、同じ制服の男の子と歩いていた。女の子は落ち着いた様子な

のに、男の子のほうはいかにもぎごちなく、並んで歩く間隔かんかくを気にしながら歩いてた。もしかしたら初デート、いや、女の子にはまったくそんな気はなくて、男の子が片思いしているだけなのかも。二人の制服は、緑の地色のチェックのスカートとパンツだった。だから、これもまた色がついている。

女の子がいた。後ろ姿だ。小学校に上がるどうかの幼い子が、お母さんと手をつないで歩いてた。一緒に歌っているのか、つないだ手を前後に振って拍子ひょうしを取っている。二人はおそろいの白いマフラーをしていた。手編みなのだろう。

Ⅲ として暖かそうだった。つまり、これもやっぱり色のついた、走馬灯に描かれるかもしれない大切な思い出ということになる。

手を動かして、またふうちゃんの背中をさすった。目を開けて、まぶたの裏に残っていた涙をぬぐった。

三人の女の子は、みんな後ろ姿だった。顔はわからない。何年前の、どこの街の思い出なのかも、わからない。女の子たちを見つめて、ふうちゃんはなにを思っていたのだろう。色つきの思い出として記憶に残っていた。それだけでいい。

走馬灯には、小学生のわたしや中学生のわたしは決して登場しない。ふうちゃんは一番会いたい人には会えない。でも、わたしは、いま、ここにいます。

③「会いたいと思ってくれて、ありがとうございました」  
ふうちゃんの背中から離れた手は、ほんのりと温ぬくもっていた。

〈中略……この後、ふうちゃんが幼い頃からの思い出を話し、遥香も自分のことを話すことになった。〉

大きな出来事ではなく、ささやかで、地味な話ばかりだ。こんな機会がなければ忘れたままだった思い出もたくさんあるし、よみがえるのはこれが初めて最後になる思い出だつてあるだろう。

でも、語っていると、だんだん楽しくなってきた。

思い出を語るのには、わたしという人間をつくらせていたジグソーパズルのピースを一つずつはずして、また戻すようなものだ。どうってことのない絵柄えがらや形のピースでも、手に取ってじっくり見ると、けっこう好きかも、ぜんぶ……。

ふうちゃんのおかげだ。④ふうちゃんが「あなたの話を聞かせて」と言ってくれたから、いろいろな出来事を思い出すことができて、思い出を語ることで、わたしは、わたしを好きになった。

ふうちゃんは、もうすぐ正真正銘のひとりぼっちになるわたしに、「自分のことを好きになる」というプレゼントをしてくれたのだろう。

目を閉じたままのふうちゃんに、わたしは話しつづける。思い出はいくらでも浮かんでくる。いつまでも話していたい。でも、ふうちゃんの体力は限界だった。呼吸は落ち着いていたけど、相槌の間隔が広がって、声も寝息とほとんど変わらない。じつはもう、わたしの話は聞かえていないのかもしれない。

大輔さんがわたしに目配せした。わたしももうなずいて、ふうちゃんの耳元で「ありがとう」と切り上げた。「思い出、たくさん聞いてくれて、うれしかったです」すると、ふうちゃんの口が動いた。

「——え？ なに？」

わたしはふうちゃんの顔に自分の顔をうんと寄せて、頬と頬が触れるほどの距離で言った。

「がんばって、もうちよつとだけ、大きな声でしゃべって」

その願いに応えて、ふうちゃんは、ほんのわずか、でも、せいっぱいに声を張ってくれた。歌っているんだ、とわかった。

ふうちゃんが歌う。

メロディーはない。言葉もほとんど聞き取れない。でも、それは確かに歌だった。わたしもよく知っている歌だったのだ。

ふうちゃん、ふらふら、ふーわふわー。

家族や友だちが、幼いふうちゃんをからかって、囁し立てる。マイペースすぎる性格や行動にあきれたり怒ったりしながら、笑って歌う。

ふうちゃん、ふらふら、ふーわふわー。

幼いふうちゃんは、「ふらふら」や「ふーわふわ」に込められた微妙なニュアンスがわかっていたのかどうか、その歌を自分のテーマソングのようにして、みんなと声を合わせて歌ったり、ときには一人で、いつまでも飽きずに歌っていたのだと、おばあちゃんに昔聞いたことがある。

ふうちゃん、ふらふら、ふーわふわ——。

人生の最期の時を間近にして、心だけ幼い頃に戻っているのだろうか。痛みも苦しみもないあの頃を自由に巡っているのだろうか。

涙ぐんで聴いていた大輔さんは、やがて、声を出さずに一緒に歌いはじめた。

ふうちゃん、ふらふら、ふーわふわ——。

歌が止まる。ふうちゃんは目を閉じたまま微笑んで、また口を小さく動かした。

新しい歌だった。同じテンポで、同じ抑揚（音声や文章の調子）だけど、歌詞が違っていた。

はるちゃん、はるばる、とんでいけ——。

大輔さんが、こらえきれないようにうめいた。嗚咽交じりに、「そうだよ……歌ってたんだ、はるちゃんが赤ちゃんの頃……」と教えてくれた。

はるちゃん、はるばる、とんでいけ——。

わたしを抱っこしたふうちゃんは、自分の歌を何度か歌ったあと、歌の主人公を「はるちゃん」に変えるのだ。「はるちゃん、はるばる」と歌って、「とんでいけ」のところで両手を伸ばして「高い高い」をしてくれる。赤ちゃんのわたしは、それが大好きだったのだという。

ふうちゃんの心が戻っていたのは、



だった。

#### IV

泣いた。

（重松 清

作『はるか、プレーメン』より）

問一

I

く

IV

に入れるのに最も適当な語の組み合わせを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

|   |   |      |    |      |     |      |    |      |
|---|---|------|----|------|-----|------|----|------|
| ア | I | ぼろぼろ | II | ひらひら | III | ぬくぬく | IV | しくしく |
| イ | I | ごつごつ | II | ほろほろ | III | ふかふか | IV | おいおい |
| ウ | I | すかすか | II | もくもく | III | ほくほく | IV | くんくん |
| エ | I | がりがり | II | ふわふわ | III | もももこ | IV | わんわん |

問二

①「ふうちゃんがまた目をつぶって繰り返してくれた『はるちゃん』は、ほかの誰の『はるちゃん』とも違っていた」とありますが、どのように違っているのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

問三

■ ■ ■ ■に入る四字の言葉を文章中から抜き出して答えなさい。

問四

②「やっと泣けた」とありますが、なぜ「やっと」と言っているのでしょうか。ここまでの遥香の気持ちを追いながらわかりやすく説明しなさい。

問五

③「ふうちゃんの背中から離れた手は、ほんのりと温もっていた」とありますが、なぜでしょうか。その理由を説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ふうちゃんの記憶の中に遥香の成長の過程が映し出されていて、二人が離れていた時も、ふうちゃんは自分のことを忘れずに愛し続けていてくれたことを実感して満足していたから。
- イ たまたまふうちゃんの記憶をのぞいてしまったが、その中に遥香の幼い姿が存在していたことを確認でき、余命いくばくもないふうちゃんの希望がちゃんと叶っていて安心したから。

ウ ふうちちゃんの記憶には、小さい遥香の姿は登場していなかったため走馬灯に登場することはないが、それでも自分のことを大切に思ってくれていることが伝わってうれしかったから。

エ うっかりふうちちゃんの記憶を見てしまったが、その思い出が色つきであったため走馬灯として残っていくことに安心し、ふうちちゃんの人生は幸せなものであったのだと確信したから。

問六

—— ④「ふうちちゃんが『あなたの話を聞かせて』と言ってくれた」とありますが、なぜふうちちゃんはそのように言ったのだと遥香は考えているのでしょうか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七

に入れるのに最も適当な語句を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦しみの中ではなくて、自由自在に過ごしていた頃

イ 大人になってからではなくて、楽しく歌っていた頃

ウ 家出した後ではなくて、周りからかわれていた頃

エ 幼い頃ではなくて、わたしと二人で暮らしていた頃

問八

【作文問題】家族との思い出の中で、あなたにとって特にうれしかったことや、記憶に残っていることは何ですか。

また、その思い出は誰と、何をしたことで、あなたはどのように感じましたか。実際の経験や具体例をあげ、作文して答えて下さい。解答は大きく濃く、いいねいな文字で、必ず解答欄内に収まるように書いて下さい。評価は、表記もふくめた言葉としての正しさ、また、巧みさにも着目しながら、文章として完結しているもののみ、内容を中心に行います。



二〇二六年度 中学校入学試験 (第一回)  
 【国語】解答用紙

|   |   |      |      |      |      |      |
|---|---|------|------|------|------|------|
| ☐ | * | A 喜劇 | B 遺骨 | C 模型 | D 装束 | E 構築 |
|---|---|------|------|------|------|------|

|   |   |    |                                                                      |      |       |  |
|---|---|----|----------------------------------------------------------------------|------|-------|--|
| ☐ | * | 問一 | エ                                                                    |      |       |  |
|   | * | 問二 | a ア                                                                  | b ウ  | c イ   |  |
|   | * | 問三 | I キ                                                                  | II イ | III オ |  |
|   | * | 問四 | ア                                                                    |      |       |  |
|   | * | 問五 | C                                                                    |      |       |  |
|   | * | 問六 | インターネットと同じ書き込みが多くあるからといって発信元が別だと考えず、本当に情報源が複数あるかを<br>確認する必要があるということ。 |      |       |  |
|   | * | 問七 | ウ                                                                    |      |       |  |
|   | * | 問八 | 知 的 な 自 律 性                                                          |      |       |  |
|   | * | 問九 | エ                                                                    |      |       |  |

|   |   |    |                                                                                                                                                   |  |
|---|---|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| ☐ | * | 問一 | エ                                                                                                                                                 |  |
|   | * | 問二 | 他の人から名前を呼ばれても、単なる呼び名の一つにすぎないが、ふうちゃんが呼んでくれる「はるちゃん」は、<br>自分の一部としてこれからもずっと残っていくものだと感じられる。                                                            |  |
|   | * | 問三 | お 母 さ ん                                                                                                                                           |  |
|   | * | 問四 | ふうちゃんが自分のことを大切に思ってくれているのが気になって走馬灯をのぞくのをためらっていたために、<br>死に直面したふうちゃんに会って話をしても泣けなかったが、ふうちゃんが今一番会いたい人は自分であると<br>言ってくれたので、ようやく安心してうれしい気持ちを実感することができたから。 |  |
|   | * | 問五 | ウ                                                                                                                                                 |  |
|   | * | 問六 | 自 分 が 死 ん で し ま っ て も 、 遥 香 が 思 い 出 を 語<br>る こ と で 遥 香 自 身 の こ と を 好 き に な っ て 強 く<br>生 き て ほ し い と 考 え た か ら 。                                   |  |
|   | * | 問七 | エ                                                                                                                                                 |  |
|   | * | 問八 | 省略                                                                                                                                                |  |

|    |  |
|----|--|
| 氏名 |  |
|----|--|

|      |  |
|------|--|
| 受験番号 |  |
|------|--|

|    |   |
|----|---|
| 得点 | * |
|----|---|